

春播きヘアリーベッチ緑肥を活かした水稻栽培

ヘアリーベッチ（写真）を3月初旬に播種し、6月上旬にフレールモアで細断処理する緑肥栽培体系において、水稻の多収品種を薄播きで中苗育苗することで、生育障害もなく、無肥料栽培でも600kg/10aの多収が得られた。

内容

マメ科緑肥のヘアリーベッチは、乾物生産量が多いため、緑肥としての肥料代替効果が高い。一方、業務用として需要が高い多収品種は、高収量を得るには多肥条件で栽培する必要がある。そこで、ヘアリーベッチの高い肥料代替性と多収品種の高生産性を活かした多収栽培技術について検討した。

ヘアリーベッチ品種「寒太郎」を2016年3月初旬に播種し、6月上旬まで細断（すき込み）時期を遅くする「春播き緑肥」を検討した。その結果、気温の上昇に応じてヘアリーベッチの生育が旺盛になり、生草重4t/10a（窒素肥料成分として8～9kg/10a相当）が確保できた。緑肥を大量にすき込むと、土壤の異常還元による生育障害が懸念される。そこで、①フレールモアによる緑肥細断処理、②栽培期間の長い中生品種、③薄播き（90g/箱、通常は120～130g/箱）と中苗（30日間育苗）を組み合わせた健苗育成、の3点を栽培体系に取り入れた無肥料栽培試験を実施した。供試品種は、

良食味品種の「ヒノヒカリ」を対照として、多収品種の「やまだわら」「たちはるか」を用いた。移植後の生育は緩慢であったが、徐々に回復し、中干し期以降、旺盛な生育を示した。収量は、「ヒノヒカリ」458kg/10aに対して、「やまだわら」618kg/10a（対比134）、「たちはるか」596kg/10a（対比130）と、多収品種は従来の良食味品種に対して3割以上の増収効果を示した（図）。

以上、ヘアリーベッチと多収品種を組み合わせることで、600kg/10a程度の収量が確保できた。

普及上の留意事項

ヘアリーベッチの種子費用（播種量3kg/10aとして約3,000円/10a）や緑肥細断処理などの作業が増えるものの、肥料代や春先の耕耘作業が削減できる。また、土壌中のガス発生を軽減する水管理を実施し、生育診断に基づいて、穂肥等を適切に追肥することでさらなる増収が見込める。

牛尾 昭浩（農産園芸部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-2410）



写真 細断直前のヘアリーベッチ生育状況

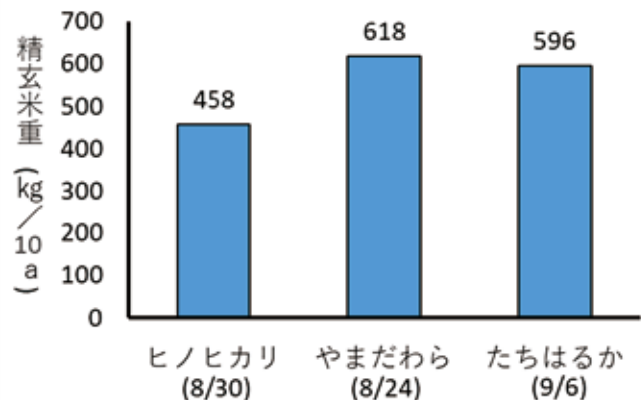


図 ヘアリーベッチ緑肥のみで栽培した水稻3品種の精玄米重の比較（2016年）
移植日：6/20、図中のカッコ内は出穂期